

実技検査・面接・小論文

1 実技検査

58年度に実施した国立大学の学部数は、一般入試では61(18%)、推薦入学実施学部では昼間部4(5.1%)であった。これらのうち、東京芸術大学は美術学部絵画科油画専攻と音楽学部声楽科の55年度入学58年度卒業の学生を対象として、入試成績とりわけ実技検査成績と在学成績等について調査し、入学者(実技成績が合格点以上であった者)の入学後の実技の成績は総じてよいこと等を報告している。和歌山大学は教育学部の実技検査受験者の共通1次試験成績を56年度以降3年間について調査したが、次第に上昇の傾向にあった。

2 面接

58年度に実施した国立大学の学部数は、一般入試では46(13%)、推薦入学実施学部では昼間部73(94%)、夜間部12(86%)であった。今回も多くは医学部に次の調査がみられた。複数の面接委員の評価結果の安定度を、分散、相関係数により調査し、経験を重ねるに応じて安定度が増してきている(岐阜大学医学部、滋賀医科大学、佐賀医科大学)。琉球大学医学部では、面接時にCMI調査(心理テスト)を試行したところ、心身に問題がありそうな受験者が約1割抽出された。更に改良を加え、入試の一部に採

用することは有用であろうと報告している。

面接成績と高校成績・共通1次成績・入試総得点の関係の調査(福井医科大学等)がある。そのうち、滋賀医大では実施初年度は比較的相関があったが2年目から相関は認められなくなった。これは手法の練達と共に面接では学力とは異質の資質を評価するようになったものと解されている。名古屋市立大学医学部における検討でも同様の見解に達している。(大学入試フォーラム No.4 54頁) 島根大学教育学部では、面接と1次の成績の相関係数は極端に低いが、1次・2次の合計点と1次の相関係数は極端に高く、ほぼ完全な1次優先型になっている点は2次試験の目的から一考を要するとしている。浜松医科大学(伊藤善彦)は、面接評点をそれ以外の学力検査等の得点に加算する場合に、配点比率、逆転域、受験者の倍率がいかなる関係になるかを試算した。

面接成績と入学後成績の関係調査もある(福井医大等)。そのうち、滋賀医大では、面接成績の上位群と下位群を比較して、教養課程成績等との関係を調査し、上位群が入学後も成績のよいことを報告している。名古屋市立大学医学部では、専門課程1・2年次の基礎医学の成績と面接成績に単年度であるが正相関性が認められた。(前記誌 No.4 49頁)

3 小論文

58年度に実施した国立大学の学部数は、一般入試では96(28%)、推薦入学実施学部では昼間部 52(67%)、夜間部 9 (64%)であった。研究も多角的に多くの大学で進められている。

出題の形式・内容の検討については、筑波大学では早くから作文・感想文を求めるのではなく、資料提示のうえ理解力・判断力・解決力・構成力・表現力を問う方式を開発してきた。また、学部・学科の教育目標に照らしてどういう資質の学生が欲しいか、自発的学習が続けられる人材を選ぶにはどういう問題がいいかが前提となると考えられている。(前記誌 No.4 49～52頁) 浜松医科大学・佐賀医大は54年度以降の間に変化したが、最近では資料提示、しかも統計資料や実験データを含む資料を与えて論理性や表現力をみる出題への方向が取られた。浜松医大では、従来の入試が学力検査等による濃度依存型の能力の判定に重きを置いてきたきらいがあるが、入学後語学系・実験系など平常態度が重視される時間依存型の科目の評価は、高校調査書の評点に強い相関を示しているほか、小論文や面接でこの面を評価する方法の検討は極めて有意義であるとしている。(前記誌 No.3 63頁) 大阪教育大学では55年度から引き続き小論文試験研究を続け、58年度では高校進路指導担当教師に対するアンケート調査で出題内容、客観性・公平性、2次入試のあり方を調べた。概して、暖かい目で好意的に受けとめて大学側の努力を長い目で見守っていると、受けとめられている。また、評価の方法・基準・実態についての調査で採点の妥当性等が小樽商科大学・

大阪教育大・佐賀医大で検討された。

成績の分析については、小論文成績と共通1次、2次試験の他教科科目や総得点、調査書の成績との関係や、小論文の問題相互間の成績の関係が、相関係数・相関図により多くの大学で調査された。(小樽商大、横浜国立大学経済学部、新潟大学医学部、浜松医大、名古屋大学法学部経済学部、大阪外国語大学、島根大学教育学部、佐賀医大)

入学後の成績との関係も、相関係数、層別クロス集計、観察法等によって調査された。(新潟大医学部、静岡大学人文学部経済学科、浜松医大、滋賀医大、佐賀医大) これらの結果、係数上の相関が認められた事例は非常に少ないが、他の方法により関係の存在が認められた事例がある。浜松医大では、54～58年度の5回の体験を機に教官72名に対するアンケート調査と、特定教官に対する小論文成績と入学者の人物評価についての面接調査とを実施した。その結果、入学後低学年の間は、小論文成績の上位群は下位群より学習成績や生活面で一般に優れていると判定されたこと、小論文成績から学力以外の能力(文科系的素養、人柄の良さ、几帳面さ等)を評価できる可能性があることを、報告している。滋賀医大では小論文と教養課程の成績関係調査を実施し、54～56年度入学者について、小論文成績の上位群17名と下位群17名を比較した結果、上位群は修得単位数・成績平均点において優り、下位群は留年率がより高かった。静岡大では、小論文と共通1次の優劣を要因として4類型の学生各10名の集団を設定し、3年次の専門科目成績との関係を分析した。またこの4集団についてゼミナール指導教官から、勉学意

欲・理解力・思考力・表現力・学習面及びゼミ生活面からみたゼミ集団における位置に関し所見を求め、興味ある分析を加えた。

なお、上記の文中、実施学部数等については、

国公立大学ガイドブック（昭和60年度版）及び文部省大学課調査に基づいた。（ ）内は該当学部総数に対する百分比である。